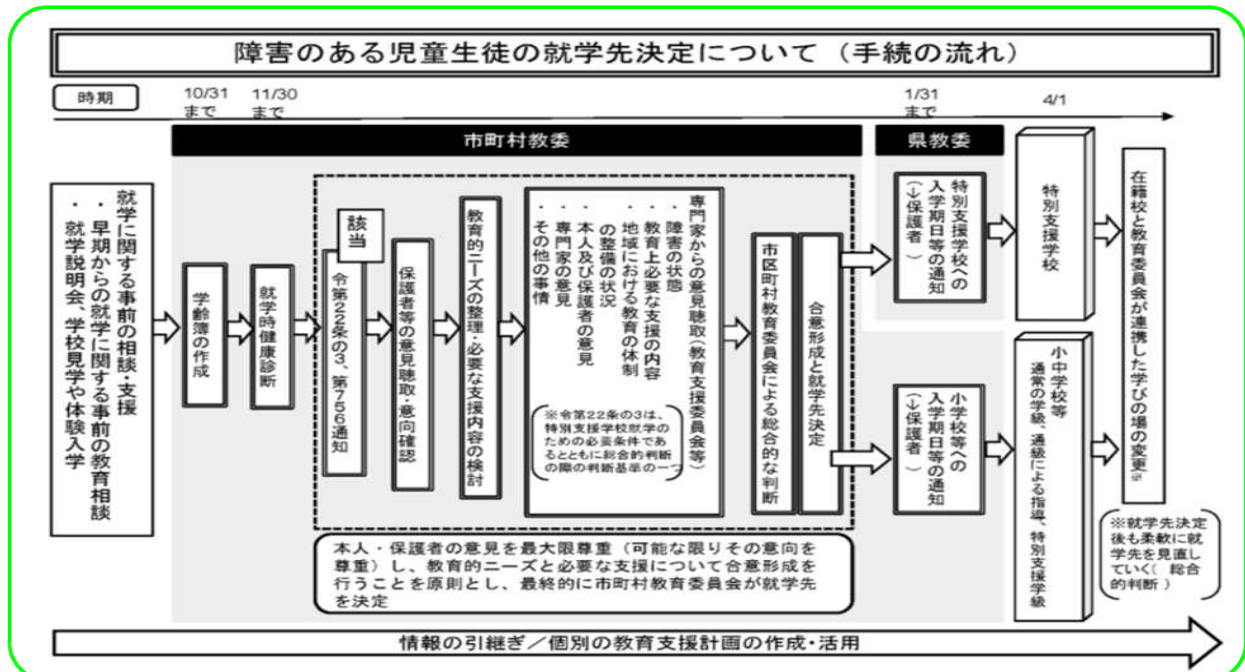


「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「子どもに合った環境」



就学先決定後も、通常の学級から特別支援学級へ、特別支援学級から通常の学級へ、特別支援学級から特別支援学校へ等、柔軟に就学先を見直すことができるようになりました。

ある小学校を訪問した際、今年度から特別支援学級に入級した子どもが生き生きと活動する姿を見ました。その子に合った環境を「居場所」としながら、通常の学級⇄通級指導教室⇄特別支援学級⇄特別支援学校を柔軟に行き来できることが重要だと感じました。

7月に入り、来年度の就学に向けた県主催の相談会がスタートしたり、園や学校では1学期の様子を踏まえ、来年度の就学先について話し合う保護者面談が計画されたりしています。子どもが自己肯定感を損なってから環境を調整するよりは、最初に手厚い指導が受けられる学びの場を用意することが大切です。しかし、子どもの発達状況、保護者の子ども理解や思い、同居している家族の理解や考え、地域性等、保護者の置かれている立場を考慮しながら、面談に臨む必要があります。

面談のポイントは、保護者と気まずいことが言える関係性ができていることを前提に、両親揃っての面談とする、必要に応じて複数で対応する、始めに時間をかける、学校・学級見学を勧める、子どものよいところを紹介してから困り感を伝える（あくまでも困っているのは子ども）などです。人は説得されてではなく、納得して動きます。正しい情報が人を動かし、正しい選択につながります。



とれたて直送便



「理解は偶然に起こり、誤解は必然に起こる」

人の考えは、経験によって左右されます。全て同じ経験を積んでいる人はいないので、人と人が100%理解し合えることは不可能です。伝わらないのは当たり前、だから100%伝える努力が必要になります。

保護者とのミスコミュニケーションを防ぐためには、主語と数字をきちんと伝える、相手との共通点を探す、頷いて相槌を打ちながら聴く、実際に会って会話するなどが大切です。情報提供はするが、結論を急ぐことなく、保護者が答えを見付ける面談を目指しましょう。